

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 26 2022*

『英語を学ぶ大学生と教える教師に
－これでいいのか？ 英語教育と文学研究』

中邨 早希

Book Review: For University Students Learning English and
Instructors of English
- Is this right? English Education and Literary Studies

Saki NAKAMURA

長崎外大論叢

第26号
(別冊)

長崎外国語大学
2022年12月

【書評】

『英語を学ぶ大学生と教える教師に
—これでいいのか？ 英語教育と文学研究』

中邨 早希

Book Review: For University Students Learning English and
Instructors of English
- Is this right? English Education and Literary Studies

Saki NAKAMURA

Abstract / Short Outline

English education has long prioritized “communication,” and has since been taken over by practical education to improve English proficiency. “*For University Students Learning English and Instructors of English - Is this right? English Education and Literary Studies*” indicates that, despite some definite achievements, the ability of students to read English and correctly comprehend it on a deeper level has been on the decline. This book analyzes English-to-Japanese translations and reports by university students to ascertain the current status and issues facing English education at the university level. The second half of this book presents the foundations of academic research on literary history and lexicography. Hence, this book reevaluates the future of English education at the university level and literary studies from the perspective of instruction.

キーワード

大学英語教育、リーディング、文学研究

概要

英語教育において「コミュニケーション」が重視され、英語運用力向上のための実用的な教育が行われるようになって久しい。確かに一定の成果があがっている面もあるが、その一方で学生の英語を深く正しく読解する能力は低下しているのではないかと著者は指摘する。本著は大学生の和訳やレポートを分析することで、大学英語教育の現状と課題を見つめなおす。後半部分では、文学史と辞典編纂を題材に学問研究の基礎を示している。これからの大学英語教育と文学研究を指導の現場から再考する一冊になっている。

序：本著を推薦する対象者

渡辺利雄著『英語を学ぶ大学生と教える教師に—これでいいのか？ 英語教育と文学研究』（2001年6月25日初版発行、研究社）（以下、本著）の「序・現在の英語教育と文学研究への提言」において、「読者として英文学科の学生、大学院生を一応念頭においているが…略…大学に籍を置き、英語

の授業を担当している方々にも、自分の足元を見直すきっかけにさせていただきたいと思っている」(p.12)と示されている。そのため本書評においても、本著を推薦する対象を大学生・大学院生・大学英語教員としたい。本著は次のような構成になっている。

序・現在の英語教育と文学研究への提言

I. 英語を学ぶことの意味

現在の大学生の英語力／一般的な英語力が基本／講読演習の現場から／大学院レベルの講読演習

II. 正確な読みと翻訳・研究論文

訓詁・注釈の伝統／翻訳の功罪／不透明な日本語表現

III. 文学研究の楽しみ

卒業論文の今昔／謎解きとレポート／ヘスターの墓の隣には誰が眠っているのか／フランクリンと現代日本の若者たち／研究者と踏み絵

IV. 文学史と批評の学び方

文学史を考える／文学史を見直す

V. 学問研究に生涯を捧げる

学問研究の基礎——正確な事実の確認／大学院への進学

このように、前半部分では主に大学英語教育現場で著者が直面した課題や指導事例が取り上げられている。第三章では文学作品を使用し、学生に謎解きをしてもらう形でレポートを課す。学生自身の考察を重視するレポート課題で、文学作品と研究論文を十二分に活用した指導例となっている。第四章では文学史に触れ、文学史を解説する難しさや授業の意義について述べている。第五章では辞典や研究書を取り上げ、研究の際に心掛けたい基礎を示している。最終部では大学院への進学を検討する学生へも大きくページを割き、学習法や心構えについて丁寧に解説を行っている。教える学生のレベルに違いはあるとしても、実際の指導例から教育や研究のヒントを得ることができる一冊になっている。

本書評では、筆者が本著を推薦する以下二つの理由を述べる。

1. 具体的な学生指導例から大学英語教育の現状を示している点
2. 文学研究における基礎の重要性を文学史と辞典編纂の視点から示している点

1. 具体的な学生指導例から大学英語教育の現状を示している点

まず著者は近年の大学生の英語について「(…)最近の大学生、特に英文学科の学生の英語を深く正しく「読む」能力は年ごとに低下しているように思われる。いわゆる「役に立つ」英語の学習に時間をとられて、じっくり腰をすえて英語を読む訓練、習慣がなくなってきたのではないか。(…)大学の授業で、時間をかけ、辞書、参考書の類を使いながら、テキストの行間を読むという習慣がおろそかにされているのではないか」(pp.2-3)と指摘する。本当に「役に立つ」英語を身に着けることができているならば、著者の言う深く正しい読みも可能なはずだが、実際はそれができているとは言い難い状況にある。コミュニケーションを重視した英語教育において、深く正しい読解は疎

まれ、悪者とされがちである。しかし実際はどちらか一方が重要で片方はそうではないと単純に言い切れる問題ではない。著者も「過去の読解を中心とした教育法はすべてが間違っていたとは思われない。英語を読むことによって、教養を身につけ、ものの考え方を学ぶということも、それなりの役割を果たしてきたのではないか」(p.6)とし、コミュニケーション重視の教育は重要だとしながらも、読解中心の教授法が学生に与えた影響は少なくないと主張する。「役に立つ」英語を目指すこと自体はよいのだが、そこで読解中心の授業を完全に否定してしまうのは行き過ぎではないだろうか。

ただ、深い読みを目指す学習はコミュニケーションに「役に立つ」学習と比較しても簡単な作業とは言いがたい。手間も時間も必要である。それは著者も認めるところだが「しかし、同時に、そうした難解な英語の長文を読み、そこから筆者の考え、主張を読み取るということは、苦勞に見合った、場合によってはそれ以上の「喜び」「楽しみ」がある。そして、これまた、時代に逆行する発言になるが、それまで知らなかった新しいものの考え方を知る、つまり、読むことを通して自らの意見、判断をより豊かにする結果となる」(pp.6-7)とし、単純な会話練習では得ることのできない「知的な「喜び」」(p.7)がそこにあるとする。たしかに語学習得を目指す中で会話練習は必要不可欠なものであり、そこに楽しさもあるが、本当の意味での学習の喜びは深い読みの中でこそ味わうことができるものではないか。この領域には単なるテンプレートの練習だけでは到達することができない。

著者は実際の指導・学生のフィードバックから、大学英語教育の抱える問題点は「大学生の英語力、とくに読解力の低下の原因として、一つ目に受験のため暗記重視だった高校時代の英語学習。二つ目に大学入学後に単位さえ取ればよいとする学習態度」(p.17)と分析する。特に暗記重視の弊害は大学入学後も続いており、学生が単語を丸暗記しようとし、知らない単語だけを軽く辞書で調べる姿は筆者も幾度となく目にしたことがある。第一章二部「「知っている」と錯覚して辞書を引かない」では、そのような学生が陥りがちな誤訳を紹介している。“a lot of”の形を知っているがゆえに、lotの意味を誤解してしまう事例、アメリカの書評誌の誤読事例が掲載されている。(p.37)このような誤読を、一度身をもって体験するとその後細心の注意を払い、既知の単語も本当にその意味でよいか熟考しながらテキストを読むようになる。しかし表面的になぞるだけで読解ができる文章しか触れていなければ、丁寧な読みを心掛けることはなくなるだろう。文学作品の講読は特にこのような作業が必要であり、またそれが丸暗記ではない単語学習にも繋がっていることを具体的に示している。

テキストに関して著者は以下のように指摘する。「(…)ある文章について前もって正解一つと誤訳3つを用意して、正解を選ばせたら、おそらく、八割の学生は正解を正しく選ぶだろうが、それを学生に最初から訳させると、正解は半数を割るのではないか。そのような意味で、正解を選ぶだけで終わってしまうマークシート型の授業、テストでは不十分である」(pp.38-39)とし、知的な交流のある講読の授業が必要だと主張する。知的な交流とは、ただ単にテキストの英語を日本語に変換するだけの授業ではなく「もちろん、そこで必要なのは、学生の努力と、教師の創意工夫と、中身のあるテキストで、テキストに関して言えば、最近、多く見られる薄っぺらな国際理解を絵解きしたようなものでは心ある学生は英語から離れてゆくだろう」(p.39)とし、読解する英文選定の重要性、そして教員側の十分な準備も求められることを教唆している。本著では文学作品を用いた指導例がいくつか挙げられている。

例えばウィリアム・ディーン・ハウエルズの『サイラス・ラパムの向上』内の“Your money or your life”という発言は、追いはぎの決まり文句を意識したものであるが(p.56)、学習者が単語一つ

ずつを調べているだけではそれに気づくことは難しい。ただこの文章が追いはぎのセリフを意図していることに気づかず読んでしまっただけでは、十分にテキストを味わえているとはいえない。この点は教員側にも知識と、探求心が要求されるだろう。

次のウィリアム・フォークナー『エミリーへのバラ』を用いた指導では、原文の曖昧さとそれを検討する読みの面白さを説いている (p.71)。間接的な表現をひとつ取り上げ、学生に自分なりの解釈を検討してもらおう。ただ安易に和訳を行うのではなく、物語全体を踏まえながらその解釈を検討するという読解経験は、英語力だけでなく読む力の向上にも繋がるだろう。深い読みに耐えうる文学作品を用いた講読には、解釈を検討する楽しみがある。

表面的な英語科目の指導としてだけでなく、特に英米文学科の学生を対象とした授業例としては、ヘンリー・ジェイムズの『アメリカ人』を用いた実例が掲載されている (pp.142-146)。このような授業では、教員側が作品を指定し学生がそれを読み自由にレポートのテーマを設定する、という課題が頻繁に見受けられてきた。著者は授業内で読解・解説を行ったうえで、従来の定説とは異なる新解釈を主張する論文を一本紹介、学生に賛成か反対か各自の意見を問わせる形を採用していた。学生のレポートには、これまで授業で検討した内容とは違った視点に学生の驚きが窺えた。また内容も講義をなぞるだけではないものとなっていた。これは学生の英語力・読みのレベルによっては難易度が高いだろうが、もちろん題材はヘンリー・ジェイムズではなくても、英語論文でなくても応用可能である。

解釈を問う発展的なレポート課題としては、ナサニエル・ホーソーン代表作『緋文字』を用いた例も挙げられている (pp.147-156)。物語の結末部分で、ヘスターの墓の横には誰が眠っているのか考えさせる課題である。これらの指導は、単に学生の興味関心を引き起こすだけでなく、著者が述べるように「(…)何よりも英語で卒業論文を書く際に役立つ主題の設定、論理の組み立て方、先行研究の確認、作品や参考文献による証拠の利用法、そして英語論文に多く使われる文型や表現を具体的な論文を通して学ぶこと」(p.156)が可能になる。そのほかにも、日本文学と絡めたレポート課題としてフランクリンの『自伝』と福沢諭吉の『福翁自伝』を読み比べさせた箇所も非常に興味深い (p.166)。レポートの採点をしていると、単に授業の内容をまとめ、参考文献の主張に沿った内容を記述しただけのものに出会うことが少なくない。学生はそれが良い成績につながると考えているのかもしれない。しかし教員側としては授業の内容をまとめてほしいわけではなく、学生がどう解釈したか、何を根拠にそう考えたのか、深い学びを促すようなレポートを課したいと思っている。授業で何を扱うか、レポートで何を問うか、未だに試行錯誤を繰り返している身としては、これらの具体的な指導例は非常に示唆に富む。

ここまで伝統的な読みの授業の重要性、そしてそれを生かした指導法について具体例を示していることを取り上げた。この読みの指導において、学生が多用しがちな翻訳についても著者は触れ、注意を促している。「もちろん良心的な翻訳は最良の注釈とあってよいだろうが、その一方で、注釈を必要とする細部は訳文全体のなかに埋没してしまうこともある。誤読は巧妙な翻訳技術によってカバーされてしまう」(pp.80-81)からである。次に原文と異なるイメージを翻訳によって得る可能性があることを、フランクリンの『自伝』、アリス・ウォーカーの『カラー・パープル』翻訳を通して示す。(pp.90-92) 翻訳だけではその作品をすべて理解したとは言えないという点は認識しておかなければならないし、学生にも忠告する必要がある。

もちろん翻訳は適切に使用すれば非常に有益なものである。「すでに述べたように、翻訳を利用することで多くの作品を知ることができ、結果的には、広い文学史的なパースペクティブをもつことができる。(…)さらに、年季の入った一流の研究者の苦心の訳文を通して、より深い、正確な読みが可能になることもある。殊にヘンリー・ジェイムズの小説の場合など、一人で読んだだけではよく理解できなかった部分をはっきりすることもある」(p.88)。ただし、筆者も経験があることだが「こうして、翻訳や映画版の誘惑にいったん身を曝すと、それに抵抗することはむずかしくなる」(p.89)こともまた事実である。特に、古典や名著は訳本が出版されていることも多い。安易な翻訳の使用の危険性についても学生に注意を促す必要があるだろう。

やはり、基本的には「(…)テキストの細部にたとえ瑣末的だと思われようともこだわって、その一語一句のもつ重みに全神経を集中させ、そして、その細部を全体のなかに位置づけ、帰納的に作品の本質に迫り、それを解明しようとする読み方は学問の基本であり、いくら強調してもしすぎることはない」(pp.82-83)という姿勢が第一だ、と改めて反省した次第である。

2. 文学研究における基礎の重要性を文学史と辞典編纂の視点から示している点

現在、多くの大学で文学や文学史といった授業が開講されている。そもそも「文学史といっても、CLHUSのように、長年の研究成果をまとめた単行本で世に問う専門研究者のレベルもあれば、教育の一環として教室で講じる大学教師のレベルもあり、私たちにとっては、後者のほうがより身近で重要な問題である」(p.202)。本書において、著者はアメリカ最初の本格的な文学史“The Cambridge History of American Literature”(1917)、アメリカ文学の独自性を示した文学史“Literary History of the United States”(1948)、多様性を示した“Columbia Literary History of the United States”(1988)これら三つの文学史を用い、それぞれの傾向と問題点を明らかにしている。詳細は本書を参照してもらいたい。各文学史には時代の流れを反映した特徴がみられる。特に“Columbia Literary History of the United States”では、近年の多様性を尊重する傾向に影響を受け、これまで取り上げられてこなかった女性やアジア系などの作家が掲載されるようになった。その一方で、限られた紙幅で作家・作品を紹介するため、多くの著名な白人男性作家が未掲載になるという事態が生じた。著者は「多様な民族の寄り合い世帯であるアメリカの社会、文化は、多様性と流動性をその最大の特徴としており、文学の正典もその事実を反映するものでなくてはならない。この前提に立つと、白人男性支配も歴史的な事実であり、これを無視し、抹殺することはできないのである」(p.217)とし、行き過ぎた排除に疑問を呈する。

ただしこれはアメリカ文学だけではなく、アメリカあるいは世界全体の問題である。安易に方向性を定めることは難しい。なぜなら「つまり、限られたアンソロジーのスペースに作家・作品を収録する際、選別は避けられないが、その場合、純然たる「芸術」作品として、その美的価値、人間の真実をとらえた普遍性を重視するのか、「よりよいアメリカ」を目指す社会改革の手段として、作家・作品を評価すべきなのかという対立」(p.226)であるためである。このような対立はハリウッド映画の配役や、有名大学の入学者選抜において人種のバランスを考慮すべきかという議論に通ずるものがある。著者もトニ・モリソンにノーベル文学賞が決定した際、彼女の受賞が黒人女性であるからではないかという声が上がっていたことを取り上げている (p.231)。

このように文学史にゆらぎが残る現代において、私たち教員側も盲目的にそれを解説するだけでは

不十分である。著者も「要するに、文学史の講義は、既成の知識を一方的に権威あるものとして授けるだけでなく、そうした知識の探求・獲得がいかなる目的と意味をもつのか、それを明らかにし、知識の質を問いつき直す試みでなければならないというのである。知識の獲得はつねに新しい「探求」を促すものでなければならないのに、旧来の文学史で教えられてきた知識は研究教育の終点であり、単なる知識の集積に終わっている。」(p.204)とし、単に歴史として文学史を教えるだけでは学びに繋がらないと指摘する。

同様に、辞典についても多くの誤りを指摘している。学生に対して原典を確認するよう指導をするが、実際辞典編纂においては「(…)信頼のおける権威者による記述はそのまま参考にして、利用することが多いようで、それが誤りの原因となる」(p.247)とし、信頼性が高いと言われている辞典であっても、利用する際は確認が必要であると説く。「もし文学研究が学問であるとしたら、その条件の一つに事実認定の正確さということがなければならないし、その正確さは大小といった量の問題ではないはずである。原則、心構えの問題であり、テキストを正確に読もうとする態度と同じことなのである」(p.250)というのは当たり前のことだと言われるかもしれないが、地道に丁寧にテキストに向き合うことこそが一番難しく重要なことであると再認識した。

学習指導要領が定められている小・中・高等学校と異なり、大学では同じ文学を教える授業であっても、担当者の裁量が比較的幅広く認められている。それぞれの指導法が認められているからこそ、文学史や辞典の扱いにおいても、文学研究と同様緻密かつ真摯に授業に取り組む重要性を説いている。

まとめ

本著は雑誌『英語青年』（研究者出版）内の連載「アメリカ文学・仕事の周辺」を再録・修正したものである。これを10年後にまとめ書籍として出版した理由として、著者は「その時、指摘した英語教育、文学研究をめぐる問題がいまだに解決されていないだけでなく、ある面では、より深刻化していて、それをあらためて指摘するの必要を感じたから」(p.269)と述べている。2001年の本著出版から、現在さらに20年ほどが経つが、これらの問題は解決するどころかさらにその傾向が高まっているように思われてならない。それがこの書評執筆の一番の理由になった。

著者は、学生の作成したレポート・和訳を用い具体的に英語教育の問題点を検討した。そして、深く正確な読みの再評価を訴えている。加えて翻訳書や辞典の問題点を挙げ、授業や文学研究における基礎の重要性を示した。授業現場での指導事例をもとに、大学英語教育と文学研究の両方を見つめなおす書になっている。

【参考文献】

渡辺利雄（2001）『英語を学ぶ大学生と教える教師に－これでいいのか？ 英語教育と文学研究』、研究社